

The Newsletter **CNEAS**

第19号

● 目次 ●

巻頭言：古資源と新産業	1
万華鏡：シベリアの美肌フルーツ・オビルピーハの奨め	2
Area Report [SIGNAL]：「中国」・「ロシア」・「内モンゴル」	3
トピック：駐ロシア連邦 野村一成特命全権大使 日本館訪問	4
日本館便り	4
研究機関紹介：モンゴル科学アカデミー・ウラーンバートル大学	5
モンゴル科学アカデミー歴史研究所とシンポジウム共催	6
最近のセンター出版物より	7
センター動向	7
活動風景	8

巻頭言

古資源と新産業

東北アジア研究センター教授 磯部 彰

利益と貢献という言葉が日常的に飛び交い、「差別化」と「結果を出す」という用語の特殊な用法がはやる今日このごろ、ゆったりと過ぎ行くものは季節の風か。

標題の「資源」「産業」という言葉は、一見、文系の学問に身を投ずる者とはそぐわないひびきがあるが、実は考え一つで、種さえあれば予想もつかない収穫がある、という意味を込めて使っている。

日本有限会社の営業種目の一つに「旅」がある。例えば、<仙台の旅>ということでキャッチフレーズと日程を立てるとする。恐らく、「松尾芭蕉のあとをたずねて」とふれこみ、松島を見たあと伊達62万石の城下町で牛タンを食べ、博物館に寄って伊達家旧蔵品に一応の驚きを懐いて、気がつけば「はやて」の車窓に映る福島をすりぬけていく、というのが一般コースであろう。少し余裕があれば、定番コースに作並温泉と三陸の海幸が加わるかもしれない。きまりきった資源から、産業は限られ、当然利潤も増えない。これは、かつての仙台藩の構造と同じである。

ところが、仙台には、古いがかなり良い鉱脈がある。東北大学である。もっとも、東北大学と言っても、片平にあるいくつかの古建築を除けば、見栄えしない建物とやや美しくないキャンパスばかりで、その点は資源とは言えない。しかし、中身に注目である。先端技術に古い資源群、これは観光資源から見れば一大鉱脈ではある。ただし、鉱脈はそのままであれば、タダの埋蔵物。先端技術とその実験室は、外部の人の出入りには様々な問題があるだろうが、研究所が設けている公開の機会を有効に活用すれば、内外から人も呼べるし、成果を社会に広報することも出来る。その一方、図書館等に所蔵される資料は、研究利用の邪魔にならないようにして、テーマを設け、一般の人々が接し易い内容で企画を立て、安全な場所で公開すれば、歴史・文化・美術などの好きな、そして目の肥えた人々にも十分たんのうできる展覧会となるであろう。もちろん、企画そのものが、

研究と表裏一体をなすはずでもある。むかしからある古資源を活用し、企画を立てるまでは大学人の仕事であろうが、それより先更に産業へと発展させるのは、実業界の人々の仕事である。実業界が人文系学問を社会系・理工系学問ほ

どには注目して来なかったことが、現在の不景気の循環からぬけ出せぬ一因ともなったのではないか。城郭の復原も良いが、時間と資金がかかる。古くて価値のある本物勝負で仙台まちおこしを図ったら良いのではないかと、ここで提言してみたことを放言したい。誰一人全容を知らぬ附属図書館の書庫の中。ユニークな企画を重ねても、数十年分の資源にはこと欠かぬ、と思いつつ、今秋、主催する研究会の名で古資源による新「観光」産業の第一歩を、仙台城三ノ丸跡で行う予定である。

企画名はいささかハデに「国宝<史記>から漱石原稿まで—東北大学附属図書館の名品—」という。入場料は常設展のままであるから、つまりは企画展の部分はタダである。国宝という全国区通用の文字、漱石という熊本・松山そして神奈川の人には心地良いひびきは、秋の味覚を十分たんのうした肥えた舌に負けじと、視覚をキラリと覚醒させるはずである。日銀に倣って、楽観的経済予測「ラクカン」をたてれば、JRと市バス、国内各航空会社に増収をもたらす一方、市内のホテルも予約が入る。当然、みやげものなどの地場産業にも、多少なりとも旅行者の資本投下がなされる。博物館への入場者も増え、仙台市の収入も増える。地震で敬遠された宮城県ではあるが、安全宣言に沿った対策のもと、今回実行の新「産業」(ベンチャー)、そして元手はいらず、皆が眼福に浸られるはずである。1人でも多くの他郷の人が仙台へと足を運べば、それは大成功と呼べるであろう。





シベリアの美肌フルーツ・オビルピーハの奨め

東北大学大学院農学研究科教授 金濱 耕基



(写真1) 日本で初めて実ったオビルピーハ

1993年と1999年のロシア科学アカデミー・シベリア支部訪問団に参加して、日本人としておそらく初めて、多機能性の新規ベリー・オビルピーハを発見し、導入しました。オビルピーハとはグミ科の植物で、

Hippophae rhamnoides L. という学名がついています。*Hippophae rhamnoides* L.には9つの亜種があって、シベリア原産の亜種オビルピーハは var. *mongolica* に分類されています。類似の植物として、ヨーロッパ原産の亜種 var. *rhamnoides*、中国原産の亜種 var. *sinensis* などが

あり、それぞれ英語でシーバックトーンあるいはドイツ語でザントドルン、中国語で沙棘と呼ばれています。いずれの亜種も日本語での適切な呼び名がないことから、著者はロシア語の oblepikha オビルピーハという呼び名で紹介しています。紹介記事の一例は下記のとおりです。

- 1993年12月 ロシア科学アカデミー・シベリア支部訪問団報告書、東北大学国際交流課、仙台。
- 1994年9～11月 農業および園芸、第69巻第9～11号、養賢堂、東京。
- 2003年3月 東北アジアアラカルト、第1号、東北大学東北アジア研究センター、仙台。
- 2001年4～11月 農業および園芸、第76巻第4～11号、養賢堂、東京。
- 2001年9月 農林統計調査、第9号、農林統計協会、東京。
- 2002年7月 農耕と園芸、第57巻第7号、誠文堂新光社、東京。
- 2003年7月 農業および園芸、第79巻第7号～第80巻第2号、～2004年2月 養賢堂、東京。

紹介記事の成果として日本でもオビルピーハという名前が受け入れられるようになり、その多機能性特に美肌効果のあることが知られるようになってきました。最近では何人かの研究者にもオビルピーハという呼び名が採用されるようになって、インターネットでいくつかのホームページが検索されます。マスコミでも何回か取り上げられました。その一例は下記のとおりです。

- 2000年11月20日 河北新報
- 2001年1月17日 東北大学新聞
- 2001年2月21日 仙台放送
- 2001年7月30日 毎日新聞
- 2002年1月16日 健康産業新聞
- 2003年6月16日 NHK仙台放送局（宮城県内版）
- 2003年6月23日 NHK仙台放送局（東北地方版）
- 2003年7月1日 NHKラジオ（NHKジャーナル）

当研究室で育てているオビルピーハの苗木は、1999年に東北アジア研究センターの工藤純一教授とロシア科学アカデミー・シベリア支部のウラジミール・ペロスルードフ教授から提供された種子から育てたものです。平成15年に初めて花が咲き果実が実りました（写真1）。このことが最近になってNHKのテレビとラジオで取り上げられ、ペロスルードフ・ナターシャさんのコメントを交えて報道されました。偶然にも、ペロスルードフ教授ご一家のお世話をいただいたこととなります。テレビ報道の直後、東北大学金属材料研究所に来日中のペロスルードフ教授の訪問を受けて、東北大学大学院農学研究科の研究圃場で育てられている、日本で初めて果実が実ったオビルピーハとご対面になられました（写真2）。

不思議な縁に結ばれた奇跡の美肌フルーツ・オビルピーハは岩手県陸前高田市の営農指導センターに提供されて、大規模実用化栽培試験に移されています。生育が順調に進み、花芽の分化が確認されたので、来年の春には花が咲き、果実が大量に収穫される予定です。地域の農業生産者に苗木を提供する段階にも入り、大きな期待を担って大切に育てられています。耕作放棄地の拡大する東北の中山間地において夢のあるフルーツとして明るい希望を提供するオビルピーハの生産が発展することを願っています。大手の加工企業の依頼を受けて、製品開発の検討を始めている段階にあり、近い将来に商品を提供したいと考えております。

このように、農業生産者と加工企業の熱い視線を受けているオビルピーハですが、日本の研究者には未だ真剣に受け入れられていないのは不思議なことです。世界中で注目され、大生産が始められているオビルピーハについては、平成15年9月にドイツのベルリンで初めての国際会議が開かれました。旧ソ連の崩壊後にロシアのシベリアから世界中に急速に広まったオビルピーハの生産利用および研究状況が報告されました。この機会を逃すことなく参加し、多くの情報を収集してきましたので、日本でも盛んにしていきたいと考えております。いつの日か、その成果について紹介する機会があれば幸いです。シベリアにはオビルピーハの関連都市が幾つかあるので、いつの日か訪問する機会も訪れることを夢見しております。

最後になりましたが、美肌フルーツ・オビルピーハの研究を始める機会を提供して頂いた東北アジア研究センターと小松基金に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



(写真2) 東北大学のオビルピーハを訪れたペロスルードフ教授ご一家

AREA REPORT

SIGNAL

中国から SARS と広東人の食文化

新型肺炎・SARSは、その発生地とされる中国広東省や隣接地の香港だけでなく、世界中を混乱に陥れ、旅行業をはじめとする経済部門にも多大な損失を生じせしめたことは記憶に新しい。冬場に再び流行するのではないかと言われているが、そうならないことを切に願うのみである。ところで、このSARSの発生源として、一時はハクビシン（果子狸）が有力視された。その後の研究で、どうもハクビシン原因説はぬれぎぬだったらしいことが判明したが、今回のSARS騒ぎは、広東人の食文化というものに対する風当たりを、ひとしきり強いものにしたことは事実である。

「広東人は何でも食う」というのが、中国国内はもとより世界的にも広く流布したイメージとなっている。実際のところ広東省地域では、「野味」と称してイヌ、ネコ、タヌキ、ヘビなど「野生料理」を専門とするレストランが各地にあり、こうした「野味」の中に、ハクビシンやモモンガなどの料理も含まれている。ハク

ビシンは最近では広東省の北部などで食用に養殖されており、イヌやヘビは内陸の湖南省あたりで養殖されたものが運ばれてくる。ただ、中国国内でも他の地域ではこれほど「野味」の食文化が発達していないので、SARS流行の際には、「それ見たことか！広東人が変なものばかり食うからだ。」と、白い目で見られることとなり、野生動物の取引や調理に対する規制も強化された。

もともと北京など中国北方の人々の間では、広東といえば南の辺境で、「野蛮」な地方文化が残っているところという先入観がある。他方、改革開放政策のもとでは経済的先進地の一つで、最近の広東人はやたらと羽振りがよい、というのも他地方の人々の印象だ。SARSの発生と共に、その原因をいち早く広東人の「特殊」な食文化の中に求めようとした研究者や報道機関の発想の裏には、こうした広東人への屈折した眼差しが潜んでいるようにも思う。
(瀬川昌久)

ロシアから 呪術の嫌疑



来客を歓迎するトーニャバあさん。ご冥福をお祈りします。

前号からの続きで、また呪術の話である。ここ数年、私はロシア・カレリア共和国で人類学のフィールド調査を行っているが、「カレリアは魔法の国」と言われるだけあって、不思議な話には事欠かない。母親たちはたいてい子どもの夜泣き治療の呪術を知っているし、村の呪術師は「政府高官の〇〇も××も私のおかげで出世できたんだよ」というようなことを言う。「私の洗礼母は実は魔女だったんです」と深刻な悩みを打ち

明ける若い女性がいるかと思えば、一生呪われ続けてきたのだと涙ながらに語る人もいる。

そんなカレリアで今年の5月、衝撃的な事件が起きた。調査地の村で、私のインフォーマントのひとり、トーニャバあさん（写真左）が、呪術の嫌疑をかけられて殺害されたのである。それも、グリム童話の「ヘンデルとグレーテル」に出てくる魔女とそっくり同じように、炉に突き入れられて。新聞でも取り上げられたこの事件だが、村人はあまり彼女に同情しなかった。魔女のように焼き殺されたなら、実際悪い魔女だったに違いない、という奇妙な理屈である。しかし私が見たトーニャバあさんは、優しい人だった。高齢でほとんど目は見え、耳は聞こえないながらも、突然訪問した私たちを大喜びで迎えてくれ、お茶を飲みながら身の上話を聞かせてくれたことは忘れられない。

殺人犯はその日のうちに逮捕された。私は今でもその村で調査を続けている。しかし、周囲で何か悪いことが起こるたびに、呪術か妖術の嫌疑をかけられるのではないかと、かすかに不安を感じてしまうのである。(藤原潤子)

内モンゴルから 内モンゴルにおけるイナゴの大発生

2003年7月31日、内モンゴル自治区の政府所在地フフホト市にイナゴの群が現れた。そのため、道路の清掃が午前3時から昼まで続いたと地元の新聞が報道した。話しによると、フフホト市には去年も大量のイナゴが発生し、人々がイナゴを集め、調理して食べたが、SARSの影響で今年はイナゴを集める人の姿がほとんどなかったそうである。

内モンゴルでは都会だけではなく、草原地域でもイナゴが大発生している。地元関係者の話によると、今年の6月からシリングル草原のほとんどの地域にイナゴの群が現れ、7月末までおよそ470万ヘクタールの草原に被害を与えた。イナゴは家畜による嗜好性が高い多年生植物ハネガヤ（*Stipa krylovii*）を好んで食べるため、草原の植生に大きなダメージを与えるケースがある。最近、夏の干ばつと冬の寒冷災害に連年襲われたシリングル盟は、イナゴを退治するための資金捻出が困難である。イナゴの被害を受けた草原の面積が広く、優れた移動力を持つイナゴの完全退治はほとんど不可能だと言われている。

「北京青年報」(2001.8.5)によると、2001年シリングル盟では530万ヘクタール面積の草原がイナゴによる被害を受けた。2000年から北京・天津地域の黄砂対策のため、シリングル



イナゴの清掃作業

盟を中心に内モンゴル草原の緑化プロジェクトが展開され、砂漠化が進んで来た草原植生の一部が回復しているが、今回のイナゴの大発生はその成果を食い尽くすほどの勢いであった。内モンゴルでは、今後もイナゴの発生が懸念されている。(颯叶)

駐ロシア連邦 野村一成特命全権大使 日本館訪問

東北アジア研究センター教授 工藤 純一



写真1：クズネツォフ所長の歓迎を受けTV会議に臨む野村大使

平成15年7月18日、駐ロシア連邦野村一成特命全権大使がノボシビルスクの日本館訪問を訪問されました。駐ロシア大使の訪問は平成11年7月21日の都甲岳洋氏以来です。

野村大使は、日本館駐在中の

塩谷昌史助手の案内により、V S A Tシステムを利用したTV会議に臨み、仙台の山田センター長と会談されました。V S A Tシステムは、1998年に日本の大学で最初にシベリアの中心都市ノボシビルスクのロシア科学アカデミーシベリア支部に連絡事務所 日本館を開設した際に設置した日本で最初のロシア通信衛星を利用したコンピュータネットワークです。このネットワークはTV会議だけではなく、同支部で受信した米国気象衛星ノアからのデータをリアルタイムで本センターへ伝送し研究に利用しています。

写真1は日本館でTV会議に臨んでいる野村大使一行を歓迎する

クズネツォフ無機化学研究所所長です。現地では大使の訪問にテレビ放送局も駆けつけ会議の様子を取材していました。TV会議の画面からは狭い日本館に人が入りきれない様子も見て取れました。写真2は仙台の本センターV S A T会議室で大使と交信する山田センター長と工藤です。大使は東北大学の日本館を中心としたロシアの研究活動に大変関心を持たれ、ハッキリした声で、今後の日本とロシアの学術交流の重要性を熱心に話されました。また、山田センター長からはシベリアの日本館訪問の御礼と今後の研究活動の支援を要請されました。TV会議は10分程度でしたが、この短い時間にもかかわらず大変有意義な会談ができました。



写真2：V S A T会議室で大使と交信中の山田センター長と工藤（後姿）

その後、大使は日本館のサイン帳に今回の訪問の感想を書かれ、次の訪問先へ向かわれました。

日本館便り nihonkan-dayori



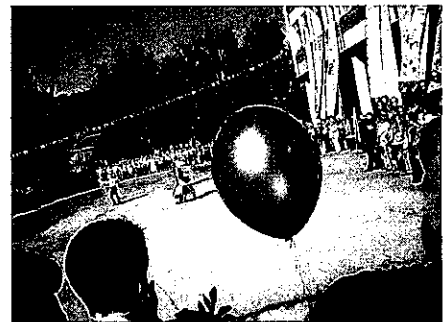
入学式での入場行進

ロシアの学校では9月1日に新年度が始まり、入学式が始まります。先日、日本語を教えているロシア人の友人から、自分の教えている小学校の入学式に誘われました。それまでロシアの入

学式には興味は無かったのですが、「日本の入学式とはスタイルが全く異なるので、見ておいた方が良い」というので、見学に行きました。見学してみて日本とロシアとで学校の入学式は全く異なると納得できました。日本の入学式では講堂に全員が集まり、厳肅な雰囲気の中で校長先生の挨拶から始まりますが、これは日本のスタイルで普遍的なものではありません。ロシアの入学式は学芸会と運動会を組み合わせたようなもので、いかに参加者が楽しめるかに重点が置かれています。生徒全員が校舎前の広場に集まり、始まる前から流行っているポップスが流れ始めます。これは例えば日本の入学式直前に浜崎あゆみの歌が流れるようなものです。

入学式は生徒代表の男女一組が司会・進行を務め、さな

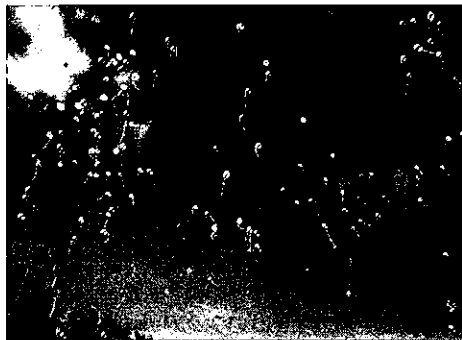
がらラジオのディスク・ジョッキーの様に進めて行きます。1年生と15年生は広場を行進して保護者に披露しますが、他の学年は各クラスでパフォーマンスを考え、見学者を楽しませよう



入学式でのダンス

な芸を見せてくれます。モダンダンスやディスコ・ダンス等の踊りや合唱がありました。先生方の紹介も堅苦しいものではなく、まるでパリのファッション・ショーの舞台に立っているかのような振り付けで音楽と共にスタイリッシュに歩くのです。非常に楽しくて楽しいものです。プログラムの最後の方では最高学年のお兄さんとお姉さんから新入生に対して絵本の贈り物がなされ、新入生は先輩に花を贈ります。この時に新入生の親御さんはカメラやハンディカムを持って我先に我が子の下に走り、決定的瞬間を捉えようと走り回ります。この姿は日本人の両親がわが子の運動会で見る姿に似ています。入学式を取ってみても、その国の国民性を反映しているのだという印象を持ちました。

(塩谷昌史)



入学式後一斉に解き放たれた風船

研究機関紹介

モンゴル科学アカデミー・ウランバートル大学

ウランバートル大学は、1992年、モンゴル科学アカデミーによって創設された技術大学を前身としている。1995年、技術大学は教育省の認可を得て総合大学のステータスを獲得した。同大の特色は、科学アカデミーの各研究所の研究者が教官を兼務し、教鞭を執ることによって、高度な教育を施すとともに、次世代研究者を養成することを目的としている点にある。当時の技術大学には、精密機械、化学技術、応用物理、応用数学が設けられ、1993～1994年度には、社会科学部が設置された。

2002年の時点で、同大には80名の教官が在籍している。現学長は言語学者のS.バイガルサイハン教授である。

現在ウランバートル大学は三つの学部、一つの大学院、物理学・技術、化学、化学技術研究所及び観測所、インフォメーション・センターを有している。

学部組織は、技術学部 (Technological Faculty)、言語・文学部 (Faculty of Language and Literature)、社会科学部 (Faculty of Social Sciences) からなる。

技術学部は4つの学科、すなわち応用数学・ソフトウェア学科 (Department of Applied Mathematics and Software)、物理・電子工学科 (Department of Physics and Electronics)、化学・化学技術学科 (Department of Chemistry, Chemical-Technology)、生物学科 (Department of Biology) から成る。技術学部の各学科は、専門科目 (Special Course) と教養科目 (Current course) を設置している。

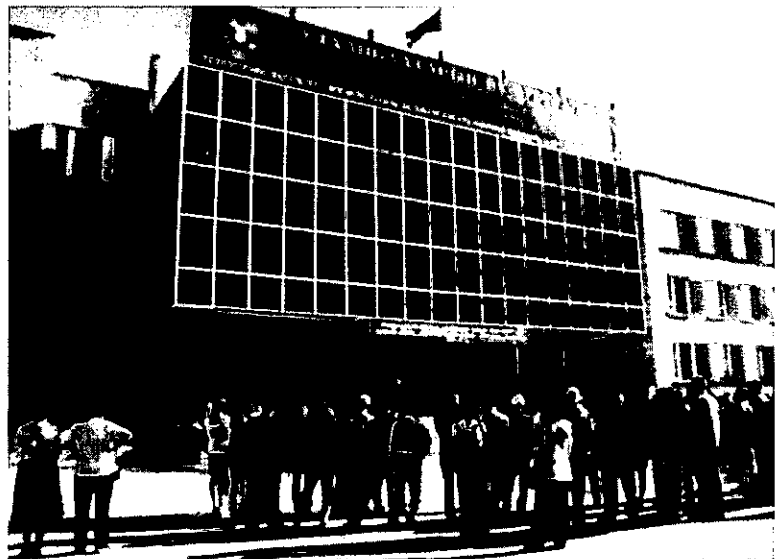
言語・文学部は、アジア諸言語学科 (Department of Asian Languages)、言語学科 (Department of Linguistics)、ヨーロッパ言語学科 (Department of European Language) によって構成されている。この学部では、教育コースとして、モンゴル語・日本語研究 (Mongolian-Japanese Study)、モンゴル語・中国語研究 (Mongolia-Chinese Study)、モンゴル語・朝鮮語研究 (Mongolian-Korean Study)、モンゴル語・英語研究 (Mongolian-English Study) を設けており、それぞれ言語学・文学及び通訳養成の講義を開いている。教養科目としてはアルタイ諸語、西洋言語、東洋文学、言語学、文学、方法論の科目が置かれ、専門科目として各学科ともモンゴル現代文学、文体論、語彙論、文献学の講義が設置され、各学科それぞれ日本語・中国語・朝鮮語・英語の語学及び通訳養成科目、各地域研究科目が設置されている。

社会科学部を構成するのは、歴史学科 (Department of History)、考古学科 (Department of Archaeology)、哲学・社会学科 (Department of Philosophy and Sociology) である。社会科学部では、教育コースとして日本研究 (Japanese study)、中国研究 (Chinese Study)、朝鮮研究 (Korean study) の三コースを開設している。たとえば日

本研究コースでは、教養科目として英語・ロシア語、美学、倫理学、論理学、資料学、歴史地誌学、モンゴル史の講義があり、専門科目として考古学・アーカイヴ学基礎や、仏教哲学、世界史、モンゴル考古学、旧モンゴル文字、モンゴル史、伝記研究の各講義や、日本語及び通訳養成のための講義が開設されている。語学の部分は中国研究コースでは中国語に、朝鮮研究コースでは朝鮮語になる。

つまり言語文学部と社会科学部では、共通の専門教育に各語学コースを組み合わせることによって教育コースの設定を行っているわけである。

大学院コースとしては、人文学・言語学・文学・歴史学・アジア研究大学院と科学技術大学院が設置されている。これら大学院の学生は、ウランバートル大学で講義を受け一方で、アカデミーの研究所に配置されて専門研



ウランバートル大学校舎

究の訓練を受けるシステムになっている。また、モスクワ・パワーエンジニアリング学院 (Moscow Power Engineering Institute) との間には共同エネルギー学院 (Joint Energy Institute) が設置され、共通の教育プログラムが設定されている。

国外の教育研究機関との提携の例としては、モスクワ・パワーエンジニアリング学院のほかに、モスクワ師範大学、コロラド大学、神戸大学、大阪国際大学、韓国の檀国大学、Pohang大学、中国の蘭州大学と協力関係にある。東北大学とは、2000年にモンゴル科学アカデミーとの間で締結された学術交流協定に基づく学生交流が行われており、2002年に本学の阿部前学長がモンゴルを訪問した際、アカデミーから名誉博士号を授与されている。

(岡 洋樹)

モンゴル科学アカデミー歴史研究所とシンポジウム共催

9月15日、モンゴル国ウラーンバートル市にあるモンゴル・日本センターを会場として、シンポジウム「モンゴル史の諸問題：歴史学・民族学からのアプローチ」がモンゴル科学アカデミー歴史研究所との共催で開催された。モンゴル科学アカデミー副総裁B.エンフトゥヴシン氏による開会の挨拶の後、プログラムに従って以下の発表が行われた。

O.オユンジャルガル（東北大学）「清代ホヴド参贊大臣管区に関する一史料について」。これは、ホヴド参贊大臣であった富俊が表した『科布多政務総冊』に関するもので、モンゴル科学アカデミー所蔵のモンゴル文写本、台湾から刊行された二つの漢文テキストを比較し、本資料の成立年代及び成立過程を明らかにするものである。

G.ダシニヤム（歴史研究所）「清代外モンゴルの一法律史料」は、報告者が発見した雍正元年（1723）年から光緒14（1888）年に至る期間の案件44件を列記した71葉からなる檔冊に関する報告である。同氏は、『理藩院則例』等清朝蒙古例の現実への適用が困難な場合に新たにとった措置を記録し、法律に準じるものとして残したものであると主張した。

L.アルタンザヤ（モンゴル国立師範大学）「あるイヘ・シャビ属下の起源について」は、アルヒーヴ所蔵の文書資料に基づいて、内モンゴルからのジェヴツンダムバのシャビ（教会領属民）への属民寄進について具体的事例を報告するものであった。これは、シャビの実態について、新しい知見を報告したものである。

S.ツォルモン（歴史研究所）「十七世紀の清朝とモンゴル関係に関する書信について」は、康熙帝のガルダン遠征について、フランス王に当たった書信が当時刊行されているが、この書信の作成者について考証したものであった。同氏によると、この書信は、康熙帝の側近として中国に滞在していたイエズス会士ジェルビヨンの作になるものであるという。

A.オチル、N.ハタンバートル（歴史研究所）「18—19世紀外モンゴルにおけるダルハン制度」は、清代のモンゴルにおけるダルハン制度、すなわち税免除特権に関する報告であった。この報告では、ハルハ地方で授与されていたダルハン特権について、アルヒーヴ所蔵の康熙25年から乾隆48年の期間におけるダルハン特権授与文書を写したトシェート・ハン部檔冊が紹介された。

岡 洋樹（東北大学）「清代モンゴル社会におけるオトグ・バグ」は、清朝が旗を編成したことによって、基本的には消滅したとされてきた服属前の社会構造で、清代



シンポジウム会場の参加者

のかなりの旗の文書資料に見られるオトグと、マイスキー等20世紀初頭のモンゴルで調査を行った研究者が言及しているバグが、旗の王公タイジ分枝の属下の社会構成であることを、アルヒーヴ所蔵の文書資料による事例研究の結果によって述べるとともに、かかる王公タイジ属下の社会構造が、内モンゴルにおいても広く見出されること、従って清代のモンゴルのザサグ旗の社会構造を清朝の法制によって規定された旗・佐領構造においてのみ理解することはできないことを主張した。

L.テルビシ（モンゴル国立大学）「モンゴルの暦学書、その利用の伝統」は、モンゴルの伝統的な暦学において、チベット起源の暦法と、中国起源の暦法が共存していることを明らかにしたものである。

吉田順一（早稲田大学）「モンゴル食文化考」は、モンゴルの食文化における生肉食の習慣と喫茶の習慣を関連づけながら、漢文史料に残された記述から、モンゴルにおける茶の利用が16世紀をさかのぼらないこと、それ以前のモンゴルにおいては、肉の生食によってビタミン摂取がなされていたことを明らかにするものであった。

アルタンガラガ（早稲田大学）「現代環境論から見たモンゴル高原」は、モンゴル高原東部ジレム地方における開墾の進展が、自然環境やモンゴル人の社会に深刻な影響を与えたことを強調しつつ、環境研究の立場からこの問題の重要性を主張するものであった。

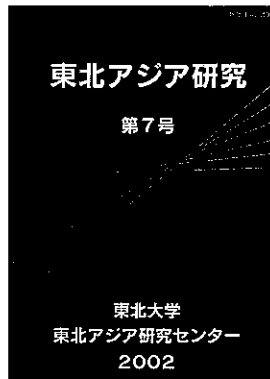
会場には、アカデミー歴史研究所、モンゴル国立大学、モンゴル国立師範大学などから、約60名の参加があり、各報告に対して活発な質問と討論がなされた。

（岡 洋樹）

最近のセンター出版物より

『東北アジア研究』第7号 2003年3月刊行

●『元朝秘史』におけるモンゴル語と漢語の人称代名詞の対応／栗林均 ●ロシア・カレリア地方に生きる一女性の人生と呪術——ナターシャ・クルチーニナの不幸をめぐる民族誌資料——／藤原潤子 ●体制転換とロシア旧教徒——ブリヤート共和国セメイスキー住民の信仰のゆくえ——／伊賀上菜穂 ●白頭山（長白山）の爆発的噴火史の再検討／宮本毅，中川光弘，長瀬敏郎，菅野均志，大場司，北村繁，谷口宏充 ●3次元ヒストグラムを用いたNOAA画像海域カテゴリの境界決定法／河野公一，工藤純一 ●Philipp Franz von Siebold's Correspondence with Leading Russian Diplomats 1852 to 1853 in the Context of his Endeavors to Open Japan for Trade and Navigation／エドガー・フランツ，吉田忠 ●Shifting patterns of economic cooperation in Northeast Asia: developments in the 1990's and future perspectives／ポボヴァ・リュードミラ ●Primary Mineralogy of Late Miocene Microbasalt from Vitim Volcanic Field: Implication to Evolution of Primitive Melts／コンスタンチン・リタソフ，伊藤嘉紀，ウラジミール・マルコヴェツ，ユーリ・リタソフ，谷口宏充 ●明末清初教派系宝巻の版本について／磯部彰



黒田卓・高倉浩樹・塩谷昌史編
『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』
東北アジア研究センター叢書第13号、2003年。

本書は、2000年2月に発足した当センターの共同研究「東北アジアにおける民族移動と文化の変遷」チュルク研究班の研究成果をまとめたものである。中央ユーラシアの歴史・文化に関する11本の論文を掲載している。内容は以下の通り。



●序論——中央ユーラシアの民族文化と歴史像——／黒田卓 ●トカテムル裔の系譜情報の復元／赤坂恒明 ●オルマンベトとその時代——口頭伝承に現れるノガイ＝オルダの有力者について——／坂井弘紀 ●19世紀前半のロシア貿易におけるアジア商人の役割——アジア向け綿織物輸出の観点より——／塩谷昌史 ●ロシア革命期の中央アジアにおける「トルキスタン」の政治的領域をめぐる——／帯谷知可 ●ジャンギアリー運動末期におけるイラン・ソ連関係の一断面——関連ロシア語文書の紹介——／黒田卓 ●ウズベキスタンにおけるオペラ劇場——ソ連邦期中央アジア文化政策の一側面——／浅村卓生 ●クルグズスタンのナショナルおよびエスニック・アイデンティティ／チョタエヴァ・チョルボン ●サハ共和国（ヤクーチア）における天然資源と民族政治／イグナティエヴァ・ヴァンダ ●ヤクート人同盟の成立と流刑者のかかわり／勝木英夫 ●サハ社会における馬飼育と不在家畜所有——ポスト社会主義下における家畜委託関係と社会経済的変動の諸相——／高倉浩樹

センター動向

■寄附研究部門

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）
- 魁叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

■地域環境研究部門資源環境学研究分野

SAVELYEV, Timofei Grigorievitch（サバリエフ、ティモフェイ・グリゴレイビッチ）助手：レーダ信号処理（平成15年8月着任）

■現在の客員研究者

本年10月～12月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

〈客員教授〉

【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシ

ア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究

- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

- 朴承憲（ボク、ショウケン）教授：中国、延辺大学東北亜研究院・院長、図們江城新経済圏構想の再構築構想の検証
- CHERNYAVSKIY, Leopold Isaakovich（チェルニャフスキー、レオポルド・イサーコヴィチ）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部無機化学研究所情報研究部・部長、VSATシステムの利用促進に関する研究

〈客員研究員〉

- 周正舒（ゾウ、ゼンシュウ）研究員：中国、電磁波による環境計測に関する研究
- MORRIS, John Francis（モリス、ジョン・フランシス）研究員：オーストラリア、宮城学院女子大学国際文化学科学科教授、近世東北史に関する研究

（岡 洋樹）



モンゴル東部の調査旅行 チンギス・ハーンの足跡を追って

東北大学東北アジア研究センター ボルフガングマーチン ボーナー、アマルサイハン、佐藤 源之



湿原の鶴

川、湖沼などの湿地が多く日本や東アジア地域に飛来するツルなど渡り鳥の営巣地としても知られている。我々が研究を行っているマイクロリモートセンシングは土壌水分の広域モニタリングに優れた手法であり、我が国が来年度打ち上げを予定している地球観測衛星ALOSに搭載されるポーラリメトリック合成開口レーダに対する期待が高まっている。

2003年6月、ボーナー教授(東北アジア研究センター客員教授・イリノイ大学シカゴ校)、アマルサイハン博士(同客員研究員・モンゴル科学アカデミー)、佐藤源之教授の3名はモンゴル科学アカデミー生態学研究所でツルの生態を専門に研究しているツピンメダック博士と共に、湿地生態調査を主目的としたモンゴル東部の現地調査を行った。

ウランバートルからモンゴル東部の最大都市チョイバルサンまで双発旅客機で飛び、ロシア製ジープでウランバートルまで走破する。直線距離では600km程度だが旅程はすべて未舗装、道のない草原地帯の湿地を巡るため、連日十時間以上走行しても3泊4日を要した。



青い湖とクリルタイ記念碑

リモートセンシングによる東北アジア地域の環境計測対象は広範であるため、目的と手段を明確にすることで初めて具体的な成果が期待できる。モンゴル東部は中国内蒙古自治区やシベリア東南部に連なるモンゴル国内では標高が低く平坦な草原地域である。また河

沼面積の減少は各地で見られ、渡り鳥の飛来ルートにも大いに影響を及ぼすと懸念される。湖沼乾燥の原因は家畜飼育のための地下水の大量汲み上げにも一因があるようである。それでも旅行の途中数多くのツルを見ることができた。繁殖の準備をする時期である。



チンギス・ハーンの壁

モンゴル・ロシアの国境に沿い西に向かいウルツ川に至る途中、道路沿いに延々続く高さ1m、幅4-5mの土塁がある。現地

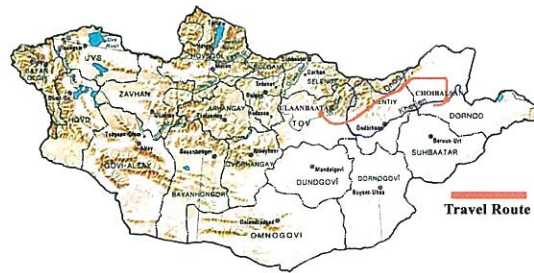
では“チンギス・ハーンの壁と呼ばれ万里の長城を思わせるが、実際にはチンギス・ハーンより更に100年ほど古く、金とモンゴル民族との境界として作られたとのことである。日本の旅行ガイドブックに記述は少ないが、モンゴルで入手した地図には数百kmにわたる壁の位置が記載されている。ウルツ川に並行するオノン川周辺は深い渓谷の森林地帯でチンギス・ハーンの生誕地とされている。

オノン川から南西に向かうと広大な麦畑での大型農場、露天堀の

砂金採り、古代の墓地、修復中の大規模寺院など様々な生活風景に遭遇した。チンギス・ハーンはクリルタイと呼ばれる部族会議でモンゴルを統一したと伝えられるが、クリルタイが行われたとされる“青い湖”には数年前政府によって記念碑が建てられた。我々は湖畔のツーリストゲルに一泊した。

ウランバートルの東約100km、ヘルレン川では大規模な橋の建設工事が行われていた。ミレニアムロードと呼ばれるモンゴルを東西に貫くハイウェイの一部となる。ここからウランバートルまでは既に完成したミレニアムロードを走る。それでも舗装道路は一部であり、大型トラックは轍を避けて草原の中、砂埃をあげながら疾走している。

6月は花の季節であり、旅行中至る所で色とりどりの絨毯を敷き詰めたような野生の花を見た。一方、同時期バイカル湖周辺の森林火災が発生し、あたかも近くで焚き火をしているような臭いと煙が2日間漂っていた。我々3人の専門はリモートセンシングの工学的基礎研究であるが、環境計測への応用を目指す場合、現地を肌で感じることの重要性を強く認識している。



旅行経路



毎年夏は調査の時期です。本年度も、センターのさまざまな分野の先生方が現地調査に出かけられました。また、協定締結機関との研究交流も活発に行われ、シンポジウムの共同開催がなされました。これらは、いずれ本誌上でも紹介していきたいと思えます。(岡 洋樹)